東海道五十三次

小田原（おだわら）

（小田原城）

東海道第九宿

東海道有数の大宿。江戸を出発して初めての城下町でもある。小田原宿は箱根峠を控えていることから宿泊客が多く東海道有数の宿場として栄えた。宿内の街道には城下町特有のカギの手に折れ曲がった桝形があるがかつての宿場の町名が細かく表示されているのでこれを頼りに歩くのもよいだろう。

弥次喜多が小田原の旅籠でゴエモン風呂の底を踏み抜いてしまった話は有名である。

名物の小田原提灯は宿内の鍋町の住人蒲左衛門が初めて作ったとされている。携行に便利なように紙の部分がまっすぐでペチャンコにたためるよう工夫されている。（明治四年創業のちん里う本店）

梅干

小田原城主の北条早雲は梅干の薬効と日持ちのよさに目をつけ小田原名産として旅人のみやげになった。

小田原の名産といえば、まず「東海道名所記」が東海道第一の名物だとする外郎でほかに梅漬、イカの塩辛、カネのたたき、提灯などがあった。

"ラヤ餅かとおもったら
くすりみせだな"

中国より渡来した外郎家が製造。当初は万病に効くという薬だった。

外郎家の祖先は約600年前の室町時代に足利将軍に招かれた中国の外交官だった。京都に定住するにあたり、万病に効く薬の製造を家業とする。薬の名は正しくは「透頂香」というが主人が「陳外郎」と名乗ったので一般には"ういろう"で知られた。

名物
提灯、梅漬、外郎、蒲鉾、透頂香